笑顔のひろば「第10号」
平成21年9月18日

発　行
川崎協同病院広報委員会
川崎市川崎区桜本 2-1-5
TEL:044-299-4781(代)
FAX:044-299-4788

医療安全管理室へようこそ！

「医療安全学習会」職場責任者医療安全研修会ロールプレイングの模様。

臨床研修指定病院には医療安全管理室が必要とされており、約三年前に開室しました。

1 安全に医療が提供できるためには努力が必要です。

医療は、患者さまの病状が刻々と変化するなかで判断し必要な技術を提供します。いろいろな人・職種が関わるため、間違う可能性は高くなります。医療行為は機械に代わることはできません。人が介在する点で医療は絶対安全とは言えません。また、患者さまには個別性があり、同じ病気でも同じように治るとは限らないという点で、医療は不確実であるといえます。

そこで、職員は日々安全行動を実践しています。患者・家族の皆さまが職員と一緒に〝安全な医療〟づくりに関わっていただくように取り組んでいます。

2 医療安全の取り組みの一部を紹介します！

医療安全管理室では医療内容の問い合わせへの対応も行っていますが、普段はより安全な医療が提供できるための職員教育や組織整備を仕事としています。

1インシデント（起こりそうになった、ないしは起こってしまったエラー）報告の活用。

職員はインシデントを「ヒヤリハット報告書」に記入します。インシデントの内容に応じて職場単位、病院全体で必要な業務改善を行い、職員のエラーの減少に努めています。

2学んで実践する職員づくり

職場責任者の役割を重視して、年二十回以上の安全に関する学習会やグループワークを開催してきました。この結果、安全への関心が高まり、職場での適切な対応、学習会の開催などにつながっています。

職員の代表者で構成したチームの会議では、学習はもとより、職員が取るべき安全行動の提案、調査、実施確認を行っています。（写真「間違えないための注意喚起」）

医師の会議では事例学習を行っています。また、安全情報を学び、インシデント報告から業務上の改善を話しあうなどしています。

今年度は職員対象に感染対策や接遇などの学習を行うことにしています。十月には学習会を開催しますので、医療従事者の皆さまはぜひご参加いただければと思います。

詳細に関しては別紙をご覧下さい。

3 安全と質を高める実践を！

当室の目標は、全職員が医療の安全性を最優先に質の高い医療活動が提供できることです。全職員が「医療の安全性」を重視する意義を理解したうえで医療活動が行えるように、患者・家族の皆さま、職員の目線で活動していきたいと思っています。

注意喚起の表記。
あちこちで目にします。

医療安全管理室 医療安全管理者
宗　和弥

「間違えない」ための
誤認防止行動促進のPOP。
これも医療安全管理室が行う
安全行動推進活動の一環です。

職員用
間違えないために行動しよう！

受付・医療行為を行う前などには
1 顔見知りでも、フルネーム・生年月日を名乗ってもらう。
2 入院患者はリストバンドも確認する。

誤認防止行動を習慣化して、「患者間違い」を減らしましょう
医療安全コアチーム

胃ろうカテーテル交換のクリニカルパスを改訂しました

近年、経皮的胃ろう造設術（PEG: percutaneous endoscopic gastrostomy）が増加していることはみなさまご存知のことです。当院でも、胃ろうの造設およびカテーテルの交換を多数おこなっております。

そんな中、おかげさまで、在宅、他院、他施設からのご紹介患者さまも、ちらほら出てまいりましたので、胃ろうカテーテル交換のクリニカルパスを作り変えました。主な特徴は、他院、他施設からの交換依頼の場合は、

①初回の場合は地域連携室に連絡していただければ、所定の用紙をファックスでお送りしますので、型、サイズなどの情報を記入して返信していただければ、前もって準備をしてスムーズな交換が可能です。

②二回目以降の方は交換日が近づいたら、こちらから依頼書をファックスでお送りします。

③交換の日に次回交換のご案内と必要な書類をお渡しします。

交換は胃ろうチューブの型、患者様の状態により、日帰り交換のコースと、2泊3日の入院でおこなうコースがあります。他の検査と組み合わせ数日の入院が必要になる場合もあります。

なお、交換でなく、胃ろう造設の御依頼は、地域医療連携室を通して消化器内科で検討し、ご返事さしあげるシステムとなっております。多数の胃ろう造設がおこなわれるにともない、さまざまな合併症や予期せぬ事故がおこる危険も増えております。スタッフ一同安全で快適な医療をおこなうのはもちろんのことですが、情報の共有のための書類、患者さまあるいは家族の方からの同意書も、そのつどいただくことになっておりますのでご理解ください。

最後に、当院では栄養サポートチーム（NST:nutrition support team）耳鼻科医による診断、作業療法士による嚥下評価を、おこなっており、胃ろう造設後に体力がつき、リハビリがすすんで、経口摂取可能となり、結果胃ろうが抜去できる症例も少数ですが経験しております。胃ろう造設は最後の姿ではなく、ふたたび経口摂取ができるまでの選択のひとつとなればな、とも考えております。

消化器内科部長　地域医療連携室長
安西 光洋

中国訪問紀行

石川 浩

SARSの禍根がまだ残るころ、今から6年ほど前から大阪の国立病院機構の華僑三世医師と一緒に同行して中国人医師に心臓カテーテル検査や経皮的冠動脈形成術の指導および中国人の患者さんの治療を行ってきました。今回よりシリーズで中国の紹介をしてみたいと思います。

いままでに貴州省貴陽市、天津市、北京市、上海市、広州に行ってきましたが、今回一番自然が残る貴州省の紹介をしてみたいと思います。

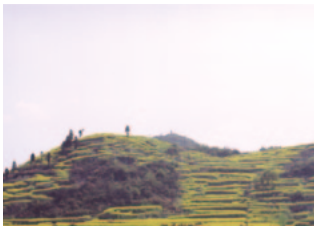
貴州省は中国の西南地区に位置し、北に四川省と重慶市、東に湖南省、南に広西チワン族自治区、西に雲南省と接しています。貴州高原山地が省域の大部分を覆い、東に高く、西に低くなっています。省都である貴陽市は人口が364万人で、標高1200mの高原都市です。3日と晴れる日が続かないため、「（太）陽が貴（重）である」という意味でつけられた都市です。

貴州省の2002年末の総人口は3837万人で、少数民族が37.9%を占めています。最大の少数民族は苗族（ミャオ族）で、プーイー族、トン族、土家族などが有名です。全国でも少数民族が比較的多い地区で、州面積の55.5%が少数民族自治区域となっています。

貴州では日本では高価な「そら豆」をたくさん食べました。貴州は貧しい州で、農薬を購入できないため無農薬だそうです。おみやげに2kgもあるそら豆をいただきました。貴州には平野部が少なく、車窓から撮影した菜の花畑は本当に美しいものでした。

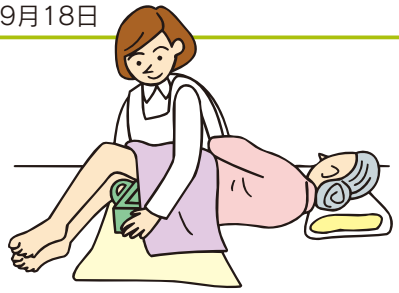
去年の春はこの菜の花畑よりも東にある中国最大級の鍾乳洞である織金打鶏洞（ジージンダージードン）へ行ってきました。安順より北へ137km、片道四時間の旅でした。途中苗族のお祭りがあり、車が通れないところを無理やり車で抜けるのに30分かかり、予定より1時間遅れて到着でした。

その鍾乳洞は全周200kmもあり、観光用に整備された道だけでも6km、2時間かかりました。階段がきつく運動不足の僕にとってはつらい工程でした。



車窓から撮影した菜の花畑

早期に回避し褥瘡を減らす。褥瘡対策チームの取組。



メンバー

医師（皮膚科）１名
薬剤師１名　管理栄養士１名
看護師（リンクナース）各病棟２名
担当看護師長
皮膚・排泄ケア認定看護師１名

褥瘡とは…

褥瘡（じょくそう）とは、平たく言うと「床ずれ」のことです。一般的に、寝たきり状態、などで、自身の体重の圧迫により末梢血管が閉塞して、仙骨部や踵や座骨部などの骨の突出した部分に皮膚の挫滅が生じて、潰瘍化を来します。かつては、「褥瘡を作るのは看護の恥」とも言われたことが有りました。ただし、癌の末期のように栄養状態が低下して、体動もままならないような悪条件がかさなると、いかんとも避けがたい場合もあります。しかし、そのような例外を除いては、できるだけ、発生要因を評価し、そのリスクが高い患者さんに対しては、それを回避するように早期から介入することで、発生を予防、あるいは軽症のうちに発見して治療することが、褥瘡を減らす一番の近道であり、それが最大の褥瘡対策委員会の役割です。

チームの活動

褥瘡対策委員による回診は、月2回委員会構成メンバーで行っています。回診の時は褥瘡のある患者全員の褥瘡をベッドサイドでケアを行い、処置方法の見直しを行っています。褥瘡を治療していくには、栄養管理が重要となります。褥瘡回診で、傷の治りが悪い場合は、栄養管理についてNST（栄養サポートチーム）や、主治医に相談し、必要な栄養分が取れるように変更するよう提言していきます。

啓蒙・教育活動として、毎月の会議の際は、リンクナースの学習会を行い、年に数回は院内の職員対象に公開セミナーを開催しています。今後も、褥瘡患者さんが減る（入院している患者さんの褥瘡がなおる）、褥瘡を発生させない事を目標に、努力していきます。

皮膚・排泄ケア認定看護師　川口　郁代

鍾乳洞の中は地下天宮と呼ばれるくらい広く、野球ができそうなくらいでした。

みごとな鍾乳石に皆、圧感されました。

一昨年訪れたのは、貴陽から車で3時間、貴陽の北部にある百里杜鵑です。樹齢100～50年の人の背丈よりも大きいつつじが山いっぱいに咲き乱れていました。すべて見て回るのに100km歩かなくてはならないという、なんとも中国らしい壮大さでした。

貴州省は3800万人の人たちが住んでいますが、心臓バイパス手術を行える心臓血管外科医がいません。そこで狭心症や心筋梗塞の患者様は経皮的冠動脈形成術（風船治療）に頼らざるを得ない状況にあります。かなり難易度が高い患者様を治療しなければならないため、日本からエキスパートの医師を招聘して治療を行い、また地元の医師の教育、指導も行っている次第です。

写真は貴州省人民医院（1500床、医師数500人）心臓病センターのセンター長はトン族の出身です。そして2005年7月、NPO日中医学技術交流会のわれわれ日本人医師と友好を結び、向こう3年間の貴州省の医師免許と客員教授の称号の授与式を行いました。記念品として貴州省の人間国宝級の方が描いた水墨画を頂戴致しました。

次回はこの秋に天津へ行って参りますので天津特集をお送りいたします。

貴州省人民医院
心臓病センター

循環器内科部長
石川 浩
貴陽医科大学 第二臨床医学院 貴州人民医院 循環器内科客員教授
天津医科大学 秦達国際心血管医院 心臓内科客員教授
北京市第六医院 外国人登録医師

INFORMATION

高校生「一日医師体験」開催

神奈川民医連の各事業所では、毎年夏休みと春休みの期間を利用して、高校生を対象に一日医師体験という企画を行っています。

この企画は、医師を目指す高校生たちが医療現場を実際に経験することで、医師を目指す気持ちを高めてもらったり、民医連の医療機関を知ってもらうのが主な目的です。

この夏における全体の受入数は約 60 人。受け入れを行う事業所全体で高校生を暖かく迎えています。

川崎協同病院ではこの夏４日間で９人が参加しました。それぞれの事業所で違う企画があり、川崎協同病院の場合は手術室での手洗い体験と、病理科で顕微鏡を使っての癌細胞の観察が人気の高い企画です。

参加した高校生の感想を聞くと、今年も満足してもらえたようです。「医師を目指す気持ちが高まった」など嬉しい声も聞かれます。中にはお礼の葉書をくれる学生もいて、受け入れた職員としては嬉しい限りです。私たちとしては、この感想に満足することなく、さらに良いものとしていきたいと考えています。

最後に、この記事をご覧になった皆さんへ。医師を目指す高校生がお知り合いにいらっしゃいましたら、この企画をぜひ紹介してあげて下さい。春と夏に高校生の皆さんをお待ちしています。

医師事務室　会田 佳成

看護体験報告

やっぱり将来は看護師になる！

川崎医療生活協同組合の看護体験は今回で五十回目を迎えました。（年二回の開催ですから二十五年続けていることになります）。現在はどこの病院でも高校生の看護体験の受入れをしていますが、こんなに昔から受入れをしていたのは民医連だけでしょう。最近では広く認知されるようになり、看護師を目指す高校生が増えて来ていることは嬉しい限りです。

今年の夏も約１２０名を越える高校生の受入れを行いました。体験を通して学生からは様々な感想が出されました。「患者さんに足浴をしていた時ニッコリと笑って『気持ちいいよ』と言ってくれた時は嬉しくて少し涙が出そうになりました。」「病棟で体験して看護師は患者さんのことも患者さんの家族のことも考えなきゃいけないんだということを改めて実感しました。」「看護師さんから看護学校での出来事や看護師になって大変だった出来事など普段聞く事が出来ない話もしていただいて、様々なことを勉強できました。」「他校の人達と友達になり同じ看護師を目指す仲間が出来たことは、私にとって大きな励みとなり看護師になりたいと思う気持ちが一層高まりました。」

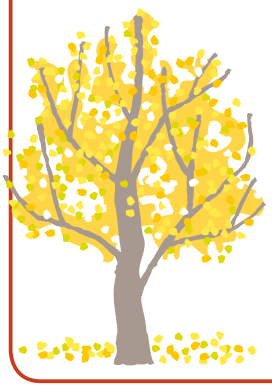
学校も学年も違う高校生たちが、一日話して過ごす中で「将来の夢」から「実現できる未来」へと気持ちを変化させる事が出来たのではないでしょうか。三年生はこれから受験が始まりますが、一人でも多くの高校生が看護学校や看護大学に合格するように私たち学生担当もサポートを続けて行きたいと思います。

看護学生担当　松澤 未和

編集後記

夏というと、連日の暑さで熱中症になったり、体調を崩す方も多いと思いますが、今年の夏は風邪症状だけで緊張が走る年になりましたね。新型インフルエンザのじわじわとした広がりが不安を強める中、病院の受付では連日のマスクの着用で暑さも倍増しています。四月から入職した新人さんは、そろそろ職場に慣れたきた頃でしょうが、マスクで半分顔が隠れてしまうので、なかなか顔を覚えてもらえないという人もいるかもしれません。学校や職場、夏の風物詩の甲子園にまで影響を与えているインフルエンザ流行が、今後さらに拡大していくと言われております。みな様、うがい手洗い等で、きちんと予防していきましょう。

この刊が発行される頃には、総選挙も終わっていますが、誰もが安心して医療や介護が受けられる平和な日本に少しでも前進していけばいいと思います。次は新年の発行になります。より一層地域のみなさまに、川崎協同病院を知っていただける広報誌を目指していきますのでよろしくお願いいたします。



医事課主任　高津 涼子